

源氏物語

玉上琢彌

編

角川書店



日本古典鑑賞講座

第 四 卷

源氏物語

(第七回配本)

昭和三十一年十二月五日 印刷
昭和三十一年十二月十日 發行

定價三六〇圓 (地方價三七〇圓)

編 者 玉 上 琢 彌

發行者 角 川 源 義

印刷者 中 内 あ き 子

發行所 角 川 書 店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
電話九段三〇一一一〇一一五

落丁・亂丁本はおとりかえいたしません

玉上琢彌
編

解 説

女の物語 リンカーンの言葉をもじつていえば、「源氏物語」は、女のために、女が書いた、女についての物語である。

書いたのは女で、紫式部と伝えられる。これは今さらいいうまでもあるまい。物語の讀者は、女子供であつた。成年の男子は讀んでも讀まぬふりをし、おもしろくともおもしろくない顔をした。「源氏物語」の作者が書いたことは確かな「紫式部日記」に、一條天皇・藤原道長・藤原公任（みんとう）が「源氏物語」に言及したことを誇らしく記し止めてゐるのは、男が讀み、しかも賞讃する口ぶりを示すことが、きわめて珍しいことだつたからである。「源氏物語」が出て、「物語」というジャンルは、あらゆる點で一變したのである。

作者と讀者が女であることは認めていただけにしても、内容が女についてのものだ、ということとは、簡單には認めていただけない。「源氏物語」の主人公は、「光る」と「薫る」の親子の源氏である。男である、ということとは、すでに御承知の通りである。しかし、彼らの生活のすべてが物語られているのではない。女の所に來た時だけ、女の世界にいる時だけが物語られる。そして、一切は、女の目から見られており、判斷されているのである。「源氏物語」は、日本文化の一盛期、平安時代の代表作品であり、最高傑作である。しかし、平安時代のすべてを現わしているのではない。女から見られる限りの世界にすぎない。

構成と精神 當時の人々は、創作を尊ばなかつた。話は事實あつたことでなくては、價值が少なかつたのである。

讀者は、物語を事實談だと考えていた。「源氏物語」の一切は、事實あつたことと思わせる書きぶりである。

「源氏物語」は、源氏の人々についての思ひ出話を、源氏に仕えた老婦人が、ぼつりぼつりして語つてゆく、それを筆記編集した、という形をとっている。

源氏とは、皇族が臣籍に降下した時、與えられる氏の一つである。平民もそうだが、源氏は一世の皇子にも與えられ、平氏は王孫以下に與えられる。源氏の方が格が上であつた。

しかし、當時は、藤原氏が政權を握つていて、源氏の優秀な人々も伴食大臣ぐらいにしかねなかつた。

なのに、「源氏物語」の源氏は、三代にわたつて政權の座についている。三代にわたつて源氏から后が立つてゐる。藤原氏は源氏と競争して、そして常に敗れている。だから勤皇の精神をこめて書いたのだ、と、説いた人も明治初年にいたし、レジスタンスだ、作者は革命思想家だ、と、主張する人も最近にいた。

「源氏物語」の作者は、偉大なる作家が常にそうであるように、批判精神の持主であり、理想を夢みている。それは儒學と佛教に根ざすようだ。しかし、當時、道長の全盛期をくつがえして、どのようにしたいという、政治的野心は持つていなかった。

この物語の作者は、一つの藝術的世界を夢想し、創作し、現實化した。「光る」と「薫る」とあだ名される美貌の源氏の親子二代にわたり、五十四卷に分れる長篇小説である。時は十一世紀初頭、ダンテより三百年前、「デカメロン」より三百五十年前、ド・ラハイエット夫人より六百年前である。杜甫・李白より二百五十年後、白樂天より百五十年後ではあるけれども、當時はどこにも小説はなかつた。しばしば「源氏物語」に比較される「紅樓夢」は、實に七百年後の作品である。

成立 わたくしは、この作品は、白樂天（七七二—八四六）の文學精神の影響が大きいと考えるし、司馬遷（B・

C、一四五—?」の「史記」が、この作品の不思議な構成に示唆するところが大きかつたろうと考える。しかし、作者はお手本らしいお手本はなかつた。當時すでに存在した昔物語むかしものがたり、おとぎ話の如き、子女を對象とする戀物語の形式によつて、戀の英雄、光る源氏みつるげんじを描きつつ、ひとり模索し、苦しんで、この作品を書いてゆき、書きつつ成長していった、と考える。

第一部・第二部・第三部 學界ではこのごろこの作品を三部に分けて考えるようになってきた。それについては、「窓」の「藤壺宮」に書くのを見ていただきたいが、第一卷「桐壺」から第三十三卷「藤裏葉」までで、英雄光る源氏の物語は完結する。若いころの派手な生活、政治的に失脚した失意時代を経て、ついに最高權力の座に登り、時代の文化創造者として榮華の絶頂に立つまでである。しかるに、おそらくは讀者の要求もあつて、作者は想を新たに第二部を書きはじめる。第四十一卷「雲隱」までである。光る源氏が出家し、やがて死ぬことを暗示する所で終るのだが、よそ目からは榮華をきわめていると思われる光る源氏が、いかに内面的に苦惱して、出家の覺悟をするに至るかが書かれる。第三部は、第五十四卷「夢浮橋」までであり、光る源氏の子、薫が宗教と戀愛の間をさまようさまを書く。作者はみずから進んでこの至難の問題をとり上げ、ついに解決しえずに終つたようである。

本書の内容 「源氏物語」は、千年むかしの作品だから、いまの讀者には讀みにくい。讀みはじめても、はじめの方で終つてしまふ。それから飛んで、第三部のはじめの方「橋姫」の卷あたりで終る。有名な所をと注文されて、結局、第一部「四」・第二部「一」・第三部「二」の比率にしたが、これでも第一部のよく讀まれる所をつくすわけにはゆかなかつた。第二部は長篇小説的になつてゐることを示そうとして、柏木・女三宮事件かしき・めさんぐわいけんにおける光る源氏を中心にした。第三部は橋姫の隙見すきみと浮舟の出家にとどめて、ゆつくり鑑賞の筆をとつた。第一部で「源氏物語」の種々相を

なるべく廣く見せようと努めた。

諸本 平安時代では「源氏物語」の本文は動いていた。寫されるたびに多少の改變があつたのである。鎌倉時代になつて、藤原定家が校定したもの（青い表紙をつけたので青表紙とおおひょうしと呼ぶ）と、新興の鎌倉で源光行・親行父子が校定したもの（父子河内守だつたので河内本（かわちほん）と呼ぶ）ができ、室町時代以後は歌壇の定家崇拜のあおりを受けて青表紙ばかりが用いられるようになった。河内本は、文意の通る本文を採用したようで、信頼できぬ。まだしも青表紙の方がましらしい。池田龜鑑博士も初めは河内本を重視されたが、晩年は青表紙を「日本古典全書」に收められた。本書も、この「古典全書」本によることにした。近ごろ使われることが多いからである。ただし河内本などとの異同について言及したこともある。この長篇の端々にまでも綿密な照應や符合が見られることは驚くべきほどである。言葉の微妙な陰影とともに、よほど注意して讀まなくてはならない。

作者、紫式部 「源氏物語」の作者と「紫式部日記」の筆者は同一人である。だから、「源氏物語」の作者は、一條天皇の中宮、藤原道長の娘、彰子に、後一條（一〇〇八）・後朱雀（一〇〇九）兩天皇御誕生のころ仕えていた女房（侍女）である。父は漢學者で、幼少の時に「史記」を讀み、彰子中宮に『新樂府』（白樂天の「文集」の卷三・四）を進講している。女房としての地位は、上の下か、中の上か、さして高くはない。

この女は、藤原爲時の娘、「榮花物語」に出る藤式部、のち紫式部と呼ばれた人である、と言われる。平安末期にすでにそう言われている。

藤原爲時は、漢學者として當時第一ではなくとも、二か三と評判されていた。その子惟規は歌人として風流人としての逸話を幾つも傳えている。曾祖父兼輔は堤中納言とあだ名された歌人で、「古今和歌集」の撰者紀貫之に目をかけ

てやつた人である。

紫式部の夫は、藤原宣孝、豪放な人物らしいが、一〇〇一年山城守で死んだ。二人の間に一女賢子がある。後冷泉天皇の乳母となり、太宰大貳高階成章と結婚した。越後の辨とも大貳の三位とも言う。母よりは出世している。

爲時は貧乏であつた。やつと越前守になり、晩年また越後守になつた。道長に呼ばれて詩を作つたりもした。紫式部は貧乏の味も知り、國守の實力も味わい、道長の權勢も身にしみていたはずである。

「紫式部日記」に認められる筆者の性格は、内向性である。「枕冊子」を書いた清少納言と對照的に違ふ。「源氏物語」は構成された作品である。この、人づきあいの悪い、人の缺點にも自分の缺點にも氣がつく、そして黙つてゐる女でこそ、書けたのであらう。

日本の古典 物語は、平安時代の女流文學（すなわち假名文學）の一種である。

平安時代で文學と言へば漢詩文であつた。假名は、平安時代になつてから、女性が作りあげたものであり、假名文學は紀貫之（九四六年歿）にはじまる。そのうち和歌は、「萬葉集」以來の歴史も長く、漢詩の技巧も早くから採り入れて、すぐ文學として認められた。「土佐日記」にはじまる假名日記は、女流作家が自己告白の様式としてねりあげていつた。簡潔な漢文と違つて柔軟な假名文は、動搖する心理を追及するにふさわしいものであることが、こうして發見されたのである。もう一つ、古來の口誦文藝（むかしばなし等）の筆録や改作があつた。歌物語と作り物語で、女子供のためのものであつた。これらは繪を見ながら侍女に本文を讀ませて聞くものであつた、とわたくしは考へている。歌物語の傑作として「伊勢物語」があり、漢文に見る如き簡潔美を示している。作り物語は、「竹取」「うつほ」「おちくぼ」と試みられていつたが、それらの長を採り短を棄て、新しい試みをあえてして成功したのが「源氏物語」であり、物語を文學として認めさせた最初の作品である。

ある人の話す物語の筆録である、これを読みあげることがそのまま古來の物語の様式になる、という建前を崩さない。卷々をまとめて一巻ずつ讀むことができるようにしてあるのも、「竹取物語」以來の短篇様式の踏襲である。しかし、和歌の一切の技巧を導入し、漢詩文を胸において想を構え文をやり、作中人物の心の動きをこまやかに追及してゆく點では、大人の男も論じうるものとなつてゐる。物語に對する待遇は一變し、有力なパトロンやプロデューサーが、女流作家を養成して、物語全盛期がはじまるのである。

しかし、假名文學の代表は長く和歌であつたから、平安時代から鎌倉時代までも、物語を論ずるばあい、作中の和歌をとりあげることの方がむしろ多く、「源氏物語」は作歌のための参考書、こういう時はこういう歌を讀むもの、という、その作歌の心構えを體得すべき書として、尊敬された。それがひいては、言葉の使い方、文の綴り方、ばあいはあいに應じた歌の贈答のしかた、古歌や故事の引き方、あるいはまた、人の心の使い方、身だしなみ、身のこなしにまで、「源氏物語」が範とされるに至つた。すなわち、古典となつたのである。

佛教が優位にある時は、天台教義の宣傳文學と解釋され、儒者がよめば禮樂を知るべき書と見たり、作者を女性の龜鑑として論じたりした。本居宣長（一七三〇—一八〇一）が、そういうのはとらわれた見方だとし、人間生來の感情にもとづいて見よ、と説いたのは卓見である。しかし彼のいう「もののあはれ」で「源氏物語」がおおいつくされるものでもない。戦後、「源氏物語」の研究は一變した。新しい體系もいずれでき上るであらう。外國の文學理論をかりて評論するのでなく、「源氏物語」によつて文學觀をつくり上げ、世界に呈示すべきである。

ウェレーの英譯は、名文の聞え高く、いまま年々版を重ねていふと言ふ。

作中人物の名 平安時代では實名を呼ばないのが禮儀であつたから、作中人物で實名がわかつてゐるのは惟光・良清・道成・時方など、家來すじの者ばかりで、これらは呼びつけにされる階級なのである。身分の高い人は實名で呼

ばず、官職で呼ぶ。それで、昇進するにつれて呼び方が變つてくる。また「中將」と呼ばれる人が五十四巻中では何人になつたりもする。そこで特定の人を呼ぶ特定の呼び名がほしくなる。五十四巻を通じて用いられるべき特定の呼び名には、作中ですでに呼ばれている名と、のちの讀者が便宜上つけた名とがある。「桐壺の更衣」「光る源氏」は前者であり、「桐壺の院」「浮舟」は後者である。特定の呼び名が時代によつて變つてきた人もある。中世までは「手習の君」と呼ばれたのに、今では「浮舟」が普通になつている類である。

主要な人物には優美な名がついている。「光る」「薫る」「匂ふ」の如く、作中に詳しい説明がされている名もある。巻名をとつたものも多い（男では「螢兵部卿宮」「柏木」、女では「葵」など）が、これにはその巻にはじめて出て來たばあい（「花散里」）、その巻でいちばん活躍するばあい（「夕霧」）、その巻で死んだばあい（「葵」「柏木」）などがある。また、その人のよんだ歌の語句が呼び名になるばあいがある（「有明」）。それが同時に巻名になっているばあいもある。（「夕顔」）のは、主要人物のよんだ歌がその巻を代表すべきものになることが多いからであらう。その他、その人の外貌から（「髭黒」）、出身地から（「明石」）、その他の特色から（「光る」「薫る」「匂ふ」など）も呼ばれる。作者が作中で呼んだのに劣らない巧みな命名を、のちの讀者も試みてきた。物語を味わつた結果なのである。

（玉上琢彌）

目次

解説

王上琢彌

三

女の物語 (一) 構成と精神 (二) 成立 (三) 第一部・第二部・第三部 (四) 本書の内容 (五) 諸本 (六) 作者、紫式部 (七) 日本の古典 (八) 作中人物の名 (九)

あらすじ

玉上琢彌

一

第一部

(一) 桐壺時代 ダンディ光る源氏

一

玉の光る御子 (一七) 光る源氏の開眼 (一八) 中流の人妻階級 (一九) 落魄の美女 (二〇) 赤い鼻の姫君 (二一) 生涯の伴侶 (二二) 不義の子 (二三)

(二) 朱雀院時代 失脚した光る源氏

三

桐壺院の讓位 (二四) 車争い (二五) 生霊の力 (二六) 去りゆく人々 (二七) 鰐月夜事件 (二八) 須磨へ逃避 (二九) 開運の祓 (三〇) 明石入道に迎えられる (三一) 明石の御方

(三六) 運命の轉回 (三七)

(三) 冷泉院時代 榮達する光る源氏

三

冷泉院の即位 (三七) 女君たちの幸福 (三八) 末摘花の姫宮 (三九) 空蟬についての後日談 (四〇) 齊官の女御 (四一) 鎌合せに源氏勝つ (四二) 明石の人々上洛す (四三) 二條院の東院 (四四) 世代の交替 (四五) 夕霧の勉強 (四六) 夕霧と雲井雁 (四七) 六條院の造替 (四八) 夕顔の遺児玉葛 (四九) 衣くばりと年賀 (五〇) 玉葛の求婚者 (五一) 源氏と玉葛の思い (五二) 近江の君の出現 (五三) 大原野行幸 (五四) 玉葛父子の對面 (五五) 嵯峨大將勝つ (五六) 嵯峨の家廷争議 (五七) 玉葛の幸福 (五八) 六條院の榮華 (五九) 薰香コンクール (六〇) 姫君入内の準備 (六一) 夕霧の結婚 (六二) 明石の姫君入内 (六三) 准太上天皇 (六四)

第二部 六條院の榮華のかげに

三

朱雀院の出家 (六六) 女三宮の御降嫁 (六七) 源氏の榮華きわまる (六八) 紫の上の悩み (六九) 柏木のものまざれ (七〇) 紫の上出家を望む (七一) 密事露顯 (七二) 柏木死す (七三) 落陽を拾う夕霧 (七四) 紫の上、死す (七五) 源氏の出家 (七六)

第三部 宇治の世界

四

匂や薰や (七八) 敗北の皇子 (七九) 出あい (八〇) 後見 (八一) 實らぬ戀 (八二) 面影を求めて (八三) あずまおと

め(五〇) 祕密(五二) 破滅(五三) とわの別れ(五五)

年立

主要人物官位年齢一覽

官位相當表

本文鑑賞

玉上琢彌

第一部 光る源氏物語

桐壺

光る源氏の父母

物語のはじめ(七五) 時代小説(七五)

桐壺の更衣

「源氏物語」の文體―その一―(七六)

野分の夕

悲しみの季節「秋」(八二) 物語と冊子繪(八三) 「源氏物語」の引き歌(八四) 祖母の心、侍女の心(八六) 朝良の命婦の心づかい(八七) 女の文學(八五) 散文文學の領域(八九) 屏風繪と物語(九七) 藤原時代の時代精神(一〇三) 弘徽殿女御という人(一二七)

五〇

四九

四八

四七

四六

四五

四四

四三

四二

長恨歌

「長恨歌」と桐壺卷(一三〇)

高麗人の豫言

最初の豫言(一三六) 「源氏物語」の文體―その二―(一三六)

帶木

光る源氏戀愛談序説

「源氏物語」の文體―その三―(一三三)

夕顔

夕顔の花

登場人物の扱い方(一三九)

八月十五夜

民家の朝(一四三) 三人の作者(一四三)

雲隠れゆく月

ヒロインの死の象徴(一四四)

夕顔の死

もののけ(一四五) 怪異譚(一四五)

老女の言葉

一〇八

一〇四

一〇三

一〇二

一〇一

一〇〇

九九

九八

九七

九六

物語り手と作者 (一六〇)

若 紫

北山の隙見

マラリヤ患者 (一六二) 美しい景色・美しい人 (一六三) 繪を見て文を聞く (一六五) 屏風繪と實景と (一六九) 明石の入道 (一七三) 海龍王の後 (一七四) 明石の御方 (一七五) 北山の旅籠 (一七七) 西方を祈る尼 (一七八) 走り來たる姫 (一八〇) 幼い姫の言葉 (一八二) 「限りなく心を盡くし聞ゆる人」 (一八二) 若紫と「伊勢物語」 (一八四) 卷名の意味 (一八五) 紫の上という人 (一八六) 失意の光る源氏序曲 (一八七) 全般的解釋 (一八九) 細部の解釋 (一九〇) 結論 (一九四)

榊

嵯峨の野宮

物語のクライマックス (一九〇) 夕顔の巻と「戀愛三昧」 (一九〇) ヒステリー患者御息所 (一九〇) 「源氏物語」の文體——その四—— (一九三) 男裝の麗人光る源氏 (一九四)

須 磨

須磨の秋

須磨の退居 (一九六) 映畫的手法 (一九六) 閑適思想 (一九七) 政治家光る源氏 (一九八)

明 石

明石の月

明石の御方 (二〇三) 結婚のしかた (二〇三) 女房の役割 (二〇三) 理想の男性 (二〇三)

繪 合

物語繪合

秋好む中宮 (二〇五) 後宮の政争 (二〇五)

螢

物語文學論

數奇の女性玉葛 (二〇六) 玉葛の政治的意義 (二〇六) 紫式部の物語論 (二〇六) 源氏の思いやり (二〇六) 文學の本質 (二〇九) 事實と創作 (二〇九) 老い將に到らんとは (二一四) ハッピーエンド (二一五)

第二部 女三宮物語

若菜 上

女三宮の降嫁決定

對面の場合というもの (二一六) 弱き者の立場 (二一六)

光る源氏の苦悶

作者の位置 (三五)

女三宮の婚儀

紫の上の苦惱 (三五)

若菜 下

女三宮の懷妊

女三宮の魅力 (三六)

柏木

女三宮の出産

生活の智慧—出家 (三六)

女三宮入道

光る源氏の權威 (三七)

幻

光る源氏物語終る

物語のとりめ (三七)

第三部 宇治の物語

その一 橋姫物語

はじめに (三七) 宇治という所 (三七) 宇治の八宮 (三八)
 八宮の登場 (三八) 薫という人 (三八) 宇治山の阿闍梨 (三八)
 宇治の姫たち (三八) 八宮不在の意味 (三八)
 橋姫の隙見 (三八) 物語の本性 (三八) 部分と全體 (三八)
 物語のクライマックス (三八) 秋の末つ方 (三八) 宇治の
 網代 (三八) 四季の御念物 (三八) 九月下旬の有明月 (三八)
 ある春の晝の記憶 (三八) 宇治の邸 (三八) 宇
 治への道 (三八) 山路の夜の霧 (三八) 宇治の川霧 (三八)
 薫の歌 (三八) 自然と人事の融合 (三八) 和歌と「源氏物
 語」 (三八) 散行のもたらす自由 (三八) 薫の身の香り (三八)
 生得の體臭 (三八) 藤袴の香 (三八) 死道を行
 く薫 (三八) 「いとすこげに」 (三八) 八宮の樂才 (三八)
 琵琶と箏と (三八) 讀者の理解と薫の想像 (三八) きんの
 琴 (三八) 音楽と佛道修行 (三八) 姫君の教育課目 (三八)
 姫君たちへの道 (三八) 琵琶と黄鐘調 (三八) 箏のこと
 (三八) 琵琶と箏の奏者についての推定 (三八) 留守番の
 應答 (三八) 留守番の拒否 (三八) 薫の望望 (三八) 作
 中人物の爵祿 (三八) 「源氏物語」解題の變遷 (三八) 姫
 君たちの住居 (三八) 薫の隙見 (三八) 降能源氏橋姫の圖
 (三八) 屋外、月と霧 (三八) 實子に重と女房 (三八)
 廂の間の姫君たち (三八) 畫面の右半分と左半分 (三八)
 一人の姫の對話 (三八) 琵琶の中の君 (三八) 箏の大君

(三七) 大君と中君の性格の違い (三〇) 美の兩極のコントラスト (三〇) 薫の驚き (三〇) 女性の魅力の評價基準 (三〇) 物語登場人物の資格 (三三) 昔物語における隙見の場面 (三三) 洞物語 (三三) 物語發端の類型、隙見 (三三) 物語の享受者 (三三) 隙見の幕おりの (三三) 戀物語への發端の場 (三四) 宇治十帖の色調 (三四) 宇治の秋の物語 (三五) 浮舟物語 (三五)

浮舟の反省

三六

浮舟の獨白 (三六) 二十世紀の小説 (三六)

浮舟の出家

三〇

薫と出家 (四一) 作者と出家 (四一)

源氏物語の窓

源氏物語の窓の序

王上 琢彌 三三

藤壺の宮

王上 琢彌 三六

昔物語と「源氏物語」 (四四) オイシナス・コンプレックス (四四) おもかげの人 (四五) 政治家光る源氏 (四五) 政治評論家紫式部 (四五) 藤壺の宮に對する總評 (五〇) 紫式部中宮に『新樂府』を進講 (五五) 作者の子の夢 (五五) 理想の女性、藤壺の宮 (五五) 間接的支持より直接的支持へ (五五) 准太上天皇、六條院 (五五)

紫の上——第二部の構成と主題—— 石田 穰二 三六

若菜上の發端 (三六) 六條の院の世界 (三六) 紫の上——その一 (三七) 紫の上——その二 (三七) 紫の上——その三 (三七) 女三の宮と柏木——その一 (三七) 若菜下 (三七) 紫の上——その四 (三七) 女三の宮と柏木——その二 (三七) 柏木 (三七) 横笛 (三七) 鈴蟲 (三七) 夕霧 (三七) 御法 (三七) 幻 (三七) 要約——その一 (三七) 要約——その二 (三七) 要約——その三 (三七) 要約——その四 (三七)

世をうづ山のをんなぎみ 清水 好子 三七

物語の方法 (三七) 日本的美意識 (三七) 藤壺と大君 (三七) 誇り高い女 (三七) 姉 (三七) いたましい女 (三七) 物語の必然性と形式性 (三七) 永遠と滅びの生と (三七) 女らしさ (三七) 浮舟 (三七) 自殺 (三七) 出家 (三七) 大君の象徴 (三七)

夕霧 阿部 秋生 三八

權威ある豫言 (三八) 夕霧 (三八) 忘れ得ぬ雲井雁 (三八) 氣長な戀心 (三八) 常識的な結婚觀 (三八) 夕霧という人物 (三八) 和魂 (三八) 源氏の教育方針 (三八) 無難な夕霧 (三八) 典型的官儀貴族 (三八)